

| | |
|--------------|---|
| Title | 岡千仞の上海体験 |
| Author(s) | 福井, 智子 |
| Citation | 大阪大学言語文化学. 15 P.17-P.28 |
| Issue Date | 2006-03-31 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/77886 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

岡千仞の上海体験*

福井 智子**

キーワード：岡千仞、『観光紀游』、上海

日本汉学家岡千仞（1833-1914），字天爵，号鹿门，出生于仙台藩的下级武士之家，年轻时曾在江户的昌平坂学问所学习汉学，并精于洋学。明治维新后，曾就职于修史馆、东京图书馆。因在旧萨摩、长洲藩等势力强大的新政府难于得志，四十八岁时辞职。之后，主要开办家塾培养后人、著述及作诗。

明治十七（1884）年五月末，喜欢旅行的岡千仞由横滨抵达上海，对中国进行了为时大约一年的游历。他以上海为据点，游历了苏州、杭州、天津、北京、广东、香港等地。途中不仅游览了中国各地的风光，体察了庶民的生活，还拜访了王韬、俞樾、李慈铭、汪士铎等著名学者及张之洞、盛宣怀、李鸿章等清朝的官吏，并向他们指出了“烟毒”“六经毒”等当时中国社会存在的弊端。路途中正值中法战争、甲申事变爆发，因此千仞的中国之旅，并非仅仅是游览名胜，而是专注于当时的中国社会和政治。归国后，他于明治二十五（1892）年出版了考察中国的汉文游记—《观光纪游》十卷。此外，还发表了其续编《观光续纪》三卷及诗集《观光游草》一卷。

在《观光纪游》的卷头，岡千仞对该书的意图作了如下说明：“是书间记中土失政弊俗。人或议其过甚。顾余异域人，直记所耳目，非有意为诽谤。他日流入中土，安知不有心者或取为药石之语乎”。鲁迅曾指出：“冈氏距明治维新后不久，还有改革的英气，所以他的日记里常有好意的苦言”（《皇汉医学》，《三闲集》所收）。可以说这是鲁迅对岡千仞的中国之旅及《观光纪游》恰如其分的评价。

本文以《观光纪游》中岡千仞在上海逗留期间记录的《航沪日记》、《沪上日记》、《沪上再记》为主要资料，通过日记中所记载的对上海的印象，在上海所接触到的日本人、所参观的日本军舰、所耳闻的有关对日本、日本人的批评以及千仞本人的“自画像”，考察千仞作为“异域之人”的真情实感，及《观光纪游》中所具有的能够为当时的中国社会进“药石之语”的诸条件。

* 岡千仞の上海経歴（福井智子 FUKUI Tomoko）

** 言語文化部非常勤講師

1 はじめに

岡千仞(1833-1914)は、字を天爵、号を鹿門といい、仙台に生まれた洋学、漢学ともに秀でた人物である。幕末期の仙台藩士であった千仞は、佐幕派の中で尊王攘夷を主張し為に投獄されるという苦い経験を経て、明治維新を迎えた。維新後は修史館編修官、東京府書籍館幹事等の職を歴任する。しかし明治政府の藩閥体制下で志を得ることは難しく、病気を理由に四十八歳で官を辞した。その後は私塾を開き、片山潜、呉秀三、館森鴻らを筆頭とする多くの学生を教育し、且つ著作と詩作に従事する生涯を送った。

生来の旅好きであった岡千仞は、明治十七(1884)年五月末、横浜を出発して中国への旅に出た。凡そ一年に亘るその旅の足跡は、上海を基点に蘇州、杭州、北京、広東、香港へと及ぶ。そして旅先で千仞は、各地の庶民生活を観察すると共に、李鴻章、王韜をはじめとする多くの官僚、及び文人を精力的に訪問し、両国の文学・文化から当時の社会情勢まで幅広く議論した。途中、清仏戦争と甲申事変の勃発に遭遇したこともあって、千仞の旅は名所旧跡訪問に止まらず、列強のアジア進出とそれに対する日中韓の未来について真剣に考える機会となった¹⁾。そしてこの旅の記録を千仞は、明治二十五(1892)年、『観光紀游』(十巻、原漢文)²⁾として発表した。これ以外にも、千仞は続編と詩集³⁾をまとめている。

さて『観光紀游』の「例言」には、本書の構成と共に、執筆の意図が以下のように明記されている。「是の書は閩¹中土の失政弊俗を記す。人或いは其の過甚なるを議す。顧るに余は異域の人にして、直²耳目する所を記すのみ、誹謗を為すの意を有するに非ず。他日、中土に流れ入れば、安くんぞ心有る者の、或いは取りて薬石の語と為さざるを知らんや」。上海の王韜に本書を送った際、中国の欠点を無遠慮に挑発したことへの不満が記された返事を千仞は受け取った。それに対しても、孔子が祖国の魯の欠点を直接述べず、韜晦して『春秋』を綴った例を挙げ、自身は「異域の人」であるから見聞したものをそのまま記述しただけで、敢えて私情を挟まないと、千仞は答えたと言う⁴⁾。同時代中国に対する鋭い観察と批判は、他の中国旅行記を凌駕する、本書の最大の特徴であった。そしてそれを支えたのが、千仞の「異域の人」、つまり日本人であることの確たる自覚であった。その上で、本書が中国に多くの読者を得る為に、漢文で綴られた点は注目される。「岡氏は、明治維新からさほど後の人ではないので、まだ革命への英気があった。だから彼の日記には、常に好意的な苦言があるのだ」(「皇漢医学」という魯迅の発言に、千仞は自身と本書に対する、最も的確な理解を得たと言える。

¹⁾ 岡千仞の経歴は、主として宇野量介『鹿門岡千仞の生涯』(発行者・岡広 1975)を参照する。

²⁾ 引用は『観光紀游』(沈雲龍主編『近代中国資料叢刊』)により、漢文の訓読は筆者による。

³⁾ 『観光続紀』(『葦名山房雑録』所収、未刊)、『観光游草』(明治二十年刊)

⁴⁾ 前掲、『鹿門岡千仞の生涯』、pp.306-307

本論文は『観光紀游』中から、主として上海滞在の記録『航滬日記』『滬上日記』『滬上再記』(以下、それぞれ『航滬』『滬上』『滬上再』とする)を取り上げる。そしてここに、「上海」の描写、「上海」で出会った「日本」への言動、及び千仞自身の姿を追う。これらを通じ、千仞にとっての「異域の人」という立場の意味、及びそれを得るに至った時代背景を、中国に対する観察と批判を例示しながら考察し、且つ『観光紀游』に備わった、中国社会への「薬石の語」となりうる諸条件を検討する。

2 岡千仞の上海素描

岡千仞がはじめて上海に足を踏み入れたのは、明治十七年六月六日の午後であった。横浜を出航して九日目に当る。立ち並ぶ無数の家々(「万家簇擁」と、外敵の襲来に備えて高く聳える砲台(「砲台盛土砂、屹然壁立」)が、長旅の千仞らを出迎えた。広い川幅を擁す黄浦江を遡る途中、行き交う大小の汽船の姿が千仞の目に映る(『航滬』六月六日)。当時の上海は紛れも無く、「東洋各埠の第一」(『航滬』「序」)であった。

日清修好条約締結により国交が開かれた1871年以降、上海での日本人の活動が始まった。翌年には上海に日本領事館が開設され、1875年からは、千仞も利用した三菱商会の横浜—上海定期航路が就航している⁵⁾。千仞がやって来た1880年後半の上海では、三井、大倉、広業の大手三洋行(「我邦大肆」)が進出し、それぞれ「高島石炭」、「北地海産物」、「雑貨」を扱い、商業活動を展開していた。またこれら大手に混じり、岸田吟香の楽善堂(薬店)もその支店を上海に置いた(『航滬』六月六日)。

「曾根(俊虎)や岡があまり詳しい上海記録を残してくれなかった⁶⁾」という指摘もあるが、以下のように千仞は、この街を特徴付ける風景を一通り描写している。まずは租界である。例えば、仏、英、米租界のその自治の様子と近代化された町並みについて、中心地「外灘」(黄浦江沿のバンド)を次のように記す。「界毎に三国は警署を置き、選卒が街を巡りて警察す。沿路の大路は、各国の公署、輪船の公司、欧米の銀行、会議堂、海関の税務署なり。楼を架くこと三、四層、宏麗比ぶるもの無し。「鉄製」の「電信線」「電灯線」「瓦斯灯」「自来水道」が完備された様子(以上『航滬』六月八日)、蘇州江周辺の「瓦斯、電気の二灯、爛然たること昼の如し」(『航滬』六月十日)といった租界の夜の明るさは、千仞の注目を引いた。また租界は、連なり続く斜面、そして色とりどりの草花(「坡陀迤邐、花卉爛斑」)に彩られた公園、パブリック・ガーデンも有した。そこは「中人垢汚して大いに園観を損」ねるという理由で、中国人の立ち入りを禁じた(『滬上』八月二十九日⁷⁾)。租界の整備された広い街路は、中国人街との大きな違いであった。

⁵⁾ 高橋孝助・古厩忠夫編『上海史』(東方書店 1995)、p.119 参照。

⁶⁾ 劉建輝『魔都上海』(講談社選書メチエ)(講談社 2000)、p.172

⁷⁾ 1868年に「中国人と犬は入るべからず」の立て札がたてられ、激しい反感を買った。

「馬車は洋製、人車は東製なり。(中略) 大道五条は、馬路と称す。中土の市街は、馬車を容れず。唯、租界のみ康衢四通し、馬車を行かしむべし。故に此の称有り」。市街間を繋ぐ大通りに立ち並ぶ中国人の商店に見られるような、赤や青に続く高い屋根と曲線を描く欄干(「隆棟曲櫺、丹碧煥發」)、ありとあらゆる商品が立ち並ぶ、その眩しいような光景(「百貨標榜、爛然炫目」)、絶え間ない人や馬の行き来、昼夜を問わず続く喧騒など、租界には皆無であった(以上『航滬』六月八日)。

旧市街である県城は、典型的な中国人の生活空間であった。千仞は最初、教え子で今は海軍に所属する平野文夫に伴われ、「小東門」から県城内に入り、「新北門」から出るコースで散策する。城内に入ったの第一印象は、「市廓雑沓にして、街衢狭隘たり。穢氣鬱攸、悪臭鼻を撲つ」と、雑踏、狭さ、不快な臭いに集約された。都市の守護神をまつ「城隍廟」、名園として知られた「豫園」も、「池上の列肆、書画、筆、墨、古器物を鬻ぐ。稍雅致有り。唯一卉木も栽えず。些かの幽趣も無し」(以上『航滬』六月十二日)等と、あまり芳しいものには思われなかった。中国人街を観察した千仞は、「市街は隘陋潔ならず。唯、陳ぶる所の貨物は、皆精良なり」(『航滬』六月十八日)等、しばしば「雅」「俗」の混在を指摘した。そしてそのバランスは、明らかに「俗」へと傾斜していた。例えばある冬の日、県城を散策していて目にしたものは、「俗」を超える凄まじい光景であった。「新北門より而して入る。門外に丐徒、襤褸百結す。兀者、尪者、劍者、盲者、聾且つ啞の者、悪疾の者、人後に尾して錢を請う。閭巷隘窄、臭気鼻を撲つ」、「転じて池心亭(豫園)に出づ。亭榭傾圮し、池水濁濁す。乞兒後を躡う。穢臭紛然たり」。これらの光景に、洋行帰りの同行者、寺田望南は愕然としたが、千仞は「未だ異とするに足らず」と言っているのけのであった(以上『滬上再』明治十八年一月二日)。

しかし県城にも「泉石の勝を有し、竹樹瀟洒、亭台雅潔、略我が邦の禪刹に似」(『航滬』六月十七日)た、静寂たる空間が存在した。それは書院である。書院とは宋以後の学校のことで、高級官僚、地方の名望家が創った教育機関を指す。自身も教育者であった千仞は、豊富な資金力で蔵書を備え、エリート教育を行う書院への興味と羨望が強く、上記の龍門書院をはじめ、也是園(蘆珠書院)、正蒙書院、求志書院等を訪れては、その学舎や庭園を見て回った。それらは、「閭閻(民間)の小民と、貴賤の懸隔すること、雲壤に止まら」(『滬上再』明治十八年一月三日)ない点で、当時の上海では別世界を作り出していた。

「一楼洋煙の二字を標す。煙を喫す客を待つ」とは、アヘン館のことである。アヘンの蔓延を中国社会の疲弊の原因と見ていた千仞は、友人らとその現場に足を運んだ。「煙室」には、二人ずつの専用の台上に横になり、管でアヘンを吸う客の姿があった。それは、「且つ燎き且つ嘘き、其の昏然たること眠るが如く、陶然たること酔うが如く、恍然

たること死するが如し。皆、佳境に入る者」（『航滬』六月十一日）であったと言う。上海一の知識人として名高く、厚意にしていた王韜さえもがアヘンの中毒者となっていた現実、そして目の前の「顔に人色無」（『滬上再』明治十八年一月二日）きアヘン喫煙者らを、千仞は終始、冷やかな視線で観察した。

一方、劇場へも二度ほど訪れた。照明の煌きと大音響（「媒灯爛燦、鼓板喧闐」）（『航滬』六月七日）、そしてダイナミックな立ち回り（「跳身旋轉、刀光躲閃」）（『滬上』八月二十七日）は、大正十（1921）年に上海を訪れた芥川龍之介も「支那の芝居の特色」に数えたものである⁹⁾。また華麗な衣装は千仞に、「我が邦の及ばざる所なり」（『滬上』八月二十七日）と賞賛された。

千仞が描いた上海に、租界に代表される西洋文明の壮かさ、精緻さ、華麗さ、自然美と、そして一部の士大夫文化を除き、雑踏と狭さと悪臭に満ちた中国庶民の生活空間、及びアヘンの流行等による社会の退廃ぶりといった、「西洋」と「東洋」、「近代」と「前近代」等の二項対立を見出すことは容易である。そしてこれらに対する千仞の評価も、また言うまでもない。千仞は「異域の人」という立場で、何憚ることなくこれら“進んだ西洋”、“遅れた中国”を活写していたのであった。

ところでこの「異域の人」の立場であるが、そのいくらか具体的な姿が、千仞の言動の中に見え隠れしている。例えば上海に向かう船上で中国人客から、「中土の風俗は、日東（日本）に異なること無し。唯、日東の専ら浄潔を事とするに若かず」と言われたのに対し、「我が国は近ごろ洋風を学び、競いて外観を事とし、漸く本色を失う」と答え、千仞は日本の盲目的な欧化を批判した（『航滬』五月三十日）。この時「浄潔」清潔は明らかに「西洋」、つまり「文明」の基準であり、日本がこの基準を充たす国というのが、両者の共通認識であった。同じく上海行きの船から「播磨洋」播磨灘を見て、千仞はその景色のすばらしさについて、「歐人は此に過り、嗟賞して已まず。曰く、山海の秀麗なるは、宇内無双なりと。楊君曰く、長江一帯は、多くは此の間に類す。唯、樹木斬伐し、山は童秃多く、此の地の蒼鬱たること愛すべきに似ずと」（『航滬』六月一日）と述べた。自然の豊かさでも日本は「西洋」の基準に適い、中国はそうではなかった。一方、書院や伝統的な工芸作品及び骨董、いささか騒がしいものの、華麗な舞台が展開される中国の芝居など、古典的教養、文化に彩られた「雅」の側面は、千仞を魅了するものであった。漢学をその教養の基礎とする千仞にとって、これは当然のことであろう。とりわけ書院や芝居に対しては、「我が邦に此等の事無し」、「我が邦の及ばざる所なり」と、日本より優位な点を認めるのであった。

千仞に痛烈な中国批判を許した「異域の人」の立場とは、「西洋」に極めて近い日本の

⁹⁾ 芥川龍之介『上海遊記』「戲台」（下）（講談社文芸文庫）、（講談社 2001）

一員で、“良識”を持って西洋文明を取り入れつつ、東洋の伝統を重視する姿勢であることが、上記の例からは確認される。

3 上海で出会った「日本」

『観光紀游』に関する先行研究では、主として千仞と中国文人らの交流、そこでなされた議論に焦点が置かれた⁹⁾。しかしこれら中国人との交流もさることながら、上海滞在中の千仞が出会った、いく例かの「日本」の存在には注目させられる。ここで言う「日本」とは、具体的には上海で接触した上海在住、或いは同時期にここを訪れた日本人、上海に来航した日本の軍艦、そして上海で聞き及んだ日本、及び日本人に対する評価を指す。『観光紀游』中には、こういった「日本」への度重なる言及が見られる。しかもそれらには、称賛に値する「日本」の姿が目立った。上海滞在中の千仞が“進んだ西洋”と“遅れた中国”の間で、具体的に何をどのように観察（称賛）したかは、以下の通りである。

まずは岸田吟香である。吟香は慶応二（1866）年にアメリカ人医師のヘボン（James Curtis Hepburn）の和英辞書編纂に協力する為、初めて上海に渡った。その後、帰国して一時期は新聞記者として活躍するが、明治十（1877）年にそれを辞して楽善堂を銀座に開き、ヘボンに教示された目薬「精錡薬」を販売する。上海の支店では目薬の他に書籍の出版も手がけ、経営を大いに成功させていた¹⁰⁾。その吟香と昌平学の同窓であったものの、長年交流の無かった千仞は、上海でにわかに関交を深めることとなった。

千仞の見た吟香は、やはりこの地で最も成功した日本人であった。その成功振りは、「…而して三井、広業、大倉の三氏以外に、吟香氏の楽善堂を推す。吟香は廿年前に上海、寧波に遊し、中土の事情に熟す。（中略）別店を漢口、福州に開き、其の業日に盛んなり。方今欧米諸国は、盛んに商道に通じ、日に富強を致す。安くんぞ能く商事に達すること、我が吟香氏の如きを得て、各埠に通商し、海外の大利を網すること、欧米人の為す所の如きならんや」（『滬上』九月十一日）、「此の間に（大手商社の）三井、広業の二洋行有ると雖も、皆官資に因る者なり。独り吟香氏のみ五都市を占め、書籍、方薬を鬻ぎ、其の業日に盛んなり」（『滬上再』一月七日）と、千仞の絶賛する所であった。また「吟香と午酌し、床に就きて臥談す。^{たまたま}会 経甫が范、姚、梅の三氏を率いて来訪す。

⁹⁾ 生島横渠「五十年前の上海」（上）（中）（下）、『同仁』（1935 1/3/5）、東亜同文会編『対支回顧録』下、『明治百年史叢書』第70巻、（1936）、中田吉信「岡千仞と王韜」、『参考書誌研究』第13号（1976）、濃紹盪「明治年間漢学家的中国之行及其觀念的変革」、『日本中国学史』（江西人民出版社 1991）、町田三郎「明治初年の中国旅行記（その2）—岡鹿門『観光紀游』—」、『明治の漢学者たち』（研文出版 1998）、王曉秋「岡千仞と『観光紀游』—近代日本人の訪中旅行記」、『中日文化交流史話』（日本エディタースクール出版部 2000）等。

¹⁰⁾ 前掲、『上海史』、p.119 参照。

吟香の名は此の間に藉たり。四人大いに悦び、再び酌す」（『再滬』九月九日）からは、吟香の評判が現地でも相当なものであったことがわかる。

吟香の事業に対し、千仞は次の二点を評価した。まず一つは、吟香の事業が民間によることである。官主導の三井、広業といった大商社と吟香が互角の競争力を持ったことを、千仞は繰り返し述べている。藩閥政府下で官を得ない千仞にとって、これは好ましくもあり、また頼もしくもあったに違いない。それから吟香の欧米、或いは「西洋」に匹敵するビジネス感覚である。劉健輝氏が吟香が明治維新を境に、従来とは逆に「日本」から「上海」へ日本のより優れた「製品」、つまり「近代」を輸出したと指摘した点も¹¹⁾、これにあたる。『観光紀游』中には、いささか性急な吟香の「西洋」流ビジネス展開への主張に対し、千仞が異を唱えた様子も窺われる（『再滬』九月十五日）。しかし日本人が更に奮起し、西洋の商人に、貿易の利益の独占を許さない状況を作り出そうという最終目的は、両者ともに同じであった。

「東洋各埠の第一」と言われた上海は、貿易港であると同時に軍港でもあった。上海滞在中に千仞は、日本の軍艦「扶桑」を二度訪れている。

日本が外国に発注・購入した最初の軍艦である「扶桑」は、「英国に遊学すること十年¹²⁾、専ら海軍学科を修す。我が邦の軍艦三十隻、少将の督する所なり」という、艦長の松村惇蔵の指揮の下、この時、上海へ来ていた。実は同時期の上海には、日本からの「扶桑」「天城」の二艦を含め、およそ八艦が来航していた。それらは皆、「中法、難を構えて以後、各国は軍艦を発し、中土の各埠を巡察」させるという、中国のアジアにおける「宗主国」としての根幹を揺るがした清仏戦争勃発に対する、本国の任務を帯びての来航であった。

艦を見学した千仞であるが、「大砲四門は、重さ十五噸、弾力は二、三里の外に達す。破裂丸の大きき斗の如し」と、まずはその戦闘能力に注目した。そしてこれらを実際に操作するに当たり、「号令には旗幟を用い、約束には符号を用いた「極めて厳粛」な指示系統があること、また松村少将の勧めで鑑賞した艦の楽隊による演奏が、千仞を甚だ感心させた（以上『航滬』六月九日）。

八月末日の二度目の訪問では、長江から帰ってきたばかりの松村から、千仞は地図や測量図を見せながらの、各埠の地理や風俗に関する詳細な説明を受けた。更に後から来た張経甫ら中国の友人たちも、松村が迎えた通訳によって艦内を案内された。張経甫は、千仞が日頃より「心を外事に用い」と認めた、数少ない中国文人の一人である。その

¹¹⁾ 前掲、『魔都上海』、pp.167-168 参照。

¹²⁾ 『日本海軍史』（海軍歴史保存会 1995）第九巻によれば、松村の留学先は英、米の二カ国で、その年数は海軍兵学校を卒業した米国でおよそ七年、英国での期間はそれよりも短かったようである。

経甫は、対外戦中という時期からも、「事ある毎に詳しく聞き、新製の諸砲は、又能く砲名を諳んず」といった様子で、「扶桑」の軍備に対して高い関心を示した（以上『滬上』八月三十一日）。

また上海の夜の海に照らし出された「扶桑」を、千仞は何度か目にした。それはまず、「晩間、二宮姓及び濯と散歩」し、「扶桑艦の灯火の星羅の如きを望まんと、小舟を棹して往観」した時に、「艦卒創意し、凡百の器具を以て、人物故事、花卉虫魚の状を模造す。意匠極めて巧」（『滬上』九月四日）みに装飾された姿であった。また友人等と酒を飲んでいると、「忽として四坐の明なること白昼の如きを見る。衆皆曰く、扶桑艦の電灯を試みると、戸を抜き出でて観る。林立する帆牆、鱗次たる市街、瞭として白昼の如き光景にも出会った。攻撃の際には敵陣を照らす、その「電光」稲光にも似た明さを放つ「扶桑」の照明に、「造化の秘を奪うこと、此に至りて極れり」（以上『滬上』九月十五日）と、千仞は驚異さえ感じたのであった。

高い戦闘能力、規律正しい指揮系統、西洋への留学経験を持ち、且つもてなしにも気を配る艦長、艦での生活を楽しむ余裕すら持ち合わせた船員たち、そして電灯で暗闇に自らの姿を浮かび上がらせる軍艦「扶桑」は、千仞に近代日本の軍事面における充実ぶりを印象付けた。これらは総じて、日本の軍艦が「西洋」の水準に至っていることを意味するものであった。

一方、日本の軍艦が「西洋」水準にあって、中国がそれに至らないことも、千仞は上海で平野の話から知った。まず「扶桑」をはじめとする日本の軍艦は、「大砲の操練」や「航海の測量」に「外人」西洋人の助けを借りないが、中国の軍艦の操縦は専ら「外人」任せであった¹³⁾。また各国の軍艦に遵守される「軍礼」を、中国は行っていない。例えば「吉凶の節時」には、入港する艦とそれを迎える国の砲台が互いに大砲を打つ習慣を持った。「扶桑」は呉淞口に入る際、中国の皇帝の長寿を祝して二十一発の祝砲を挙げた。ところが中国の砲台はこれに応じなかった。訳を上海の「道台」地方長官に問えば、欧米の軍艦にこの習慣が無いからだと言う。しかしこれは中国で「軍礼」が行われない為に、各国も中国に対して行っていないにすぎなかった。「夷狄」西洋諸国を礼儀知らずと罵る中国に対し、千仞はこういった夜郎自大な態度が、外国勢力の侵入を招くと結論付けた。「其れ今日の事を致すは、実に故有る也」（以上『滬上』六月十四日）。

また、アメリカの軍艦を見学した時に、まず巧みな英語力でアメリカの軍人とやりとりする年若い平野、武田の二氏を見て、千仞は日本の教育が「欧学」を講じ、その成果をあげていることを実感した。そして「大艦を駛せ巨砲を粧い、欧米各国と抗礼して交

¹³⁾ 『観光続紀』の「海軍」の項にも、「…唯（中国の）士官水師は、皆水師營の使用する所にて、海軍学校の学科を伝う者に非ず、技術は未熟にて、未だ西人の笑う所と為るを免れず」（原漢文）と記述する。

を講ず。彼も亦、待するに友朋国を以てす。此れ宜しく大いに家国の為に慶すべき也」(『航滬』六月十六日)と、大いに満足するのであった。

東領事から千仞は、強韌で命知らずな日本の水夫を、欧米人が好んで雇う事を聞かされた(『滬上再』十二月十七日)。「日本人」の身体的、精神的優位性が、西洋人に評価された例と言える。

以上、いく人かの日本人や日本の軍艦など、千仞が上海で出会った“優れた”「日本」の例を見てきた。これらには決して多くはないものの、必ず西洋人、或いは中国人の評価が提示された点が注目される。

4 岡千仞の自画像

岡千仞自身、上海に滞在する日本人の一人であった。「異域の人」として西洋、中国、日本を観察、批評する千仞の「自画像」をここに概観したいと思う。

上海最初の華字紙『申報』は、「日東の文豪某、著書千卷を携え、中土の山水の游を為す」と、千仞の訪中を報ずる記事を掲載した(『航滬』六月十六日)。中国を旅する千仞は、まずは漢学者、儒者であった。上海で千仞が交流した中国人と言えば、王韜、張経甫、詩人の芋仙など皆文人であり、彼等の間でなされたのは、詩や書物の贈答といった伝統的な文人交流であった。また上海で迎えた元旦に、三井氏の宴席で出会った二人のイギリス人も、「余の儒生たるを聞き、容を改め敬を致す」といった態度をとり、千仞に敬意を示したという(以上『滬上再』明治十八年一月一日)。

中国旅行中の千仞は、終始和服を着用した。当時上海にいた日本人の服装が、「領事館の館員と一、二の会社員」のみ洋服を着、ほとんどは「木綿の短き単衣に三尺ヘコ帯」姿で、中国人、西洋人らから「奇風俗」と称されたという岸田吟香の報告¹⁴⁾に照らせば、千仞の姿がさほど異質だったとは思われない。しかし多くの中国庶民、特に地方では和服は珍しく、好奇心と時には嫌悪心を抱かせた。「市人は余の異服を見て簇擁す。瓜、瓦、石を投ずる者有り。猶、我が邦の三十年前の、歐人始めて江戸に来たりし時のごとし」(『蘇杭日記下』八月四日)。また明治維新によって旧来の制度を改めつつ、西欧文明を急速に導入し、政治制度の変革はもちろんのこと、暦法や服装などの「祖先伝来のきまり」を変更した日本に対し、強い反感を抱く中国人官僚、知識人も多数いた。時の権力者の李鴻章も服装の変更には批判的で、森有礼に苦言を呈したという¹⁵⁾。その李鴻章が天津で千仞と面会した際に、千仞の「故服」和服を目にし、諧謔的な口調で「古望古心」

¹⁴⁾ 杉浦正『岸田吟香—資料から見たその一生—』(汲古書院 1996)、p.298

¹⁵⁾ 王曉秋『アヘン戦争から辛亥革命—日本人の中国観と中国人の日本観』(東方書店 1991)、pp.111-115

と述べた。それに対して千仞は、「敝邦の官途に列するは、欧服せざるを得ず。小人は処士なり。故に故服を襲る。邦俗は固より斯くの如し。古の一字は小人の説くを悦ばざる所なり」（『燕京日記上』十月十日）と切り替えした。「異域」での和服の着用は、旧習への拘泥ではなく、一方的な欧化への反発と、「処士」或いは「林下の人」「山人」を自称する千仞の、「在野」であることの、確たる表明であった。

興亜を主張した千仞は、この旅の中で上海道台、李鴻章らと積極的に議論の機会を持ち、自身の意見を述べた。そして清仏戦争に対しては、ある打開策を提案した。それは李鴻章が醇、恭二親王を奉じてイギリス、ドイツ、或いはアメリカを訪れ、中国の苦境を訴え、且つフランスの中国進出がそれらの国に及ぼす悪影響を指摘することで、各国の協力を得て事の收拾を図るという策であった。この大胆で型破りな方策は結局中国官僚に採用されず、千仞を大いに失望させる。しかしこの策を最初に語った張経甫と、経甫を介して知った王韜からは絶大な支持を得た。「（王韜は、北游に旅立つ千仞への）経甫の送序を觀、醇、恭二親王を奉るの一段に至り、髀を搏ちて妙と称す。酒間に序を草して以て贈らる。曰く『鹿門は義侠の士也』と。余は躡躑たること半生、晩くに紫詮、経甫の二人を得、海外の知己と為し、以て少しく自慰すべし」（『滬上』九月二十六日）。いささか自嘲気味ではあるものの、「義侠の士」という言葉は、国内で「在野」の批判者¹⁶⁾に留まる千仞が上海で興亜の思いを高め、それに共感者を得た充実感に溢れる。

上海はまた千仞に、「西洋」と対等関係にある「日本」の国民であることを、まさに実感させる地でもあった。例えば先述のように、アメリカの軍人や三井氏の所で出会ったイギリス人らの千仞に対する態度は、丁重を極めていた。また中国人の入園を禁ずるパブリック・ガーデンも、日本人の千仞は自由に闊歩できたのであった。

5 中国社会に対する「薬石の語」としての『観光紀游』

以上では、上海体験の記述を通じ、千仞の中国への眼差しとその批判精神、称賛すべき「日本」との出会い、そして千仞の自画像を概観してきた。最後にこれらが、『観光紀游』が中国社会に対する「薬石の語」となることを願った千仞の意図と、いかなる関係を持ったかを検討する。

まず、千仞は自身が「異域の人」であるが故に、何憚ることなく中国社会の弊害を批判出来たと同時に、自国の利点を取り上げることも可能であった点を考えてみたい。千仞が称賛した「日本」は、岸田吟香といい、軍艦「扶桑」といい、新教育を受けた若者といい、概ね維新の産物である。維新以後の西洋一辺倒には常に批判的であったものの、「立国三千年の陋習を一掃」し、「明治中興の基」（『滬上』十二月二十一日）を建て、

¹⁶⁾ 前掲、『魔都上海』、p.171

そして西洋諸国と対等関係を築く日本社会の方向性には、千仞の満足感は大きかった。そしてそれらを時勢と確信していた。甲午事変で混乱する朝鮮にも、千仞は幕末の勤王、攘夷を巡る動乱をくぐり、維新を迎えた日本の過去を重ねている（『滬上再』十二月三十日）。

明治十(1877)年勃発の西南戦争を経て、中央集権国家としての安定期を迎えていた明治政府であるが、千仞が中国を旅したのは、明治十七年から翌年にかけてであった。日本が西洋の文物を柔軟に取り入れ、そして近代国家としての体制を着々と整えてきた中で、中国が清仏戦争や甲申事変と、国際社会の力学関係に組み込まれるその現場を千仞は目撃した訳である。そこで中国国内の荒廃と外圧に喘ぐ姿を見た千仞には、その速因を厳しく指摘すると同時に、これらの克服の先に、日本同様の安定と発展があることを明示すべきだと思われた。『観光紀游』が疲弊した中国社会への「薬石の語」となることを、千仞は願っていた。中国人や西洋人といった、自身以外の客観的評価を交えながらの“優れた”「日本」の例示は、近代国家、日本の一員であることの自信だけではなく、「異域の人」として批判者に徹する千仞には、むしろ「役目」として自覚された行為だったと言える。

また「異域の人」千仞は、儒者であり、且つ「在野」の人でもあった。これらは、知識人を中心とした多くの中国人と千仞の間に、一種の連帯感を意識させたはずである。先に『観光紀游』が、中国人に読まれることを意図して漢文で書かれた点には触れた。中国語を操れなかったことから、千仞が旅の途中でなした議論も、専ら漢文による筆談であった。儒者として身につけた漢文力と思考力が、千仞の批判を直接相手に伝達することを可能にしたのである。更に中国社会への苦言と提言が、日本政府に左右されたものではないことは、千仞自身が「在野」の人であったことで、より説得力を有した。清仏戦争打開の提言こそ採用されなかったが、李鴻章に「日東の文人、(副島)蒼海と千仞のみ」と言わしめ、仕官も求められたという¹⁷⁾。単に「異域の人」であっただけならば、李鴻章や上海道台、更には魯迅による評価を得られたかは疑問である。儒者であり、「在野」の人である立場は、前者は漢字文化圏、後者は西洋に対する東アジア連合に支えられる。近代期の日中の国境線を越えたある種の連帯感、親近感を中国文人との間に共有できたことも、千仞の苦言を中国社会への「薬石の語」たらしめる要因だったと思われる。

「壮絶たり禹域の海、ここに清法の闘ふに逢ふ、如何ぞ二豎子、われをして志業を半ばならしむ」(「雑憶詩」)。これは、岡千仞が自身の中国旅行を振り返って詠んだ漢詩の一首であった。清仏戦争の勃発に出会い、またその身が病に侵されたために、予定を切

¹⁷⁾ 前掲、『鹿門岡千仞の生涯』、p.321

り上げて帰国せざるを得なかったことを惜しむ内容である。こういった無念の思いもあって、千仞の鋭い観察力と批判精神は、「異域の人」というその立場を精一杯活用し、『観光紀游』を中国社会への「薬石の語」として結晶させる原動力となったと言える。